

計画をデザインの視点でマニュアル化した「ハッ場ダム環境デザイン構想」
「ハッ場ダム整備デザインマニュアル」は、以降のデザイン整備のプロセスを変えるきっかけになりました。

デザインの可能性を追求する

時間が前後しますが、1970年代、工業デザインは今後どんどん新しい展開ができると感じていました。これからは建築もインダストリアルデザイン（ID）の領域になると。その例がメタボリズムの旗手であった黒川紀章氏設計の「中銀カプセルタワービル」でした。工場生産されたカプセルユニットを使う、そして移動・交換も可能というコンセプトはまさにIDです。デザインとは考え方で、展開は無限。対象も街並みからピン1本にいたるまで多岐にわたります。

「ワイヤーグripper」は、画廊や美術館で絵画を壁面に掲示する道具です。これの登場で美術館や画廊での絵画の架け替えを容易にしました。1974年の「メディカルトランスポートーションシステム」は、建築家の伊東豊雄氏、東大の石井威望教授との共同プロジェクトです。家と医療機関をコンピューター制御で行き来するモビリティシステム構想で、ベッドサ

イズのユニットが公道を自動通行、診察後は寝たまま帰宅できる。私はプロダクトデザインを作成しました。『江戸川区公共サイン』は自治体としては初めての総合サイン計画でした。その後自治体のサイン計画の基本となつていきます。『都バスデザイン』はコン

若い世代に「経験」

「チャレンジ」という宝を
大学と個人事務所、ダブルステージでの活動を長く続け、2004年には愛知県立芸術大学教授に就任。博士課程の設置計画を任せられ、法人化後の大学改革、施設の老朽化に伴い「キャンパスマスタープラン2010」を作成しました。2009年には愛知芸大で初の試みとして、ミラノサローネへの作品展示を実現

しました。学生・院生10名と渡伊し、世界のデザインの現場を体感、学生たちにはよい経験になったようです。我が身を振り返ると、学生時代の様々な経験とチャレンジが、その後の人生を導いてくれました。若い人たちに向けて、今自分ができる精一杯の働きかけをしていきたいと思つていきます。2006年から文科省大学設置審議会の専門委員を務め、大学評価

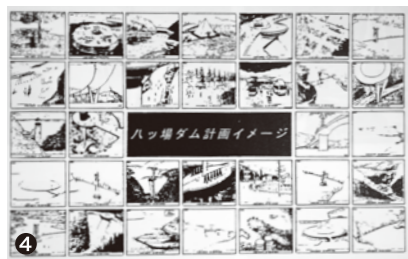
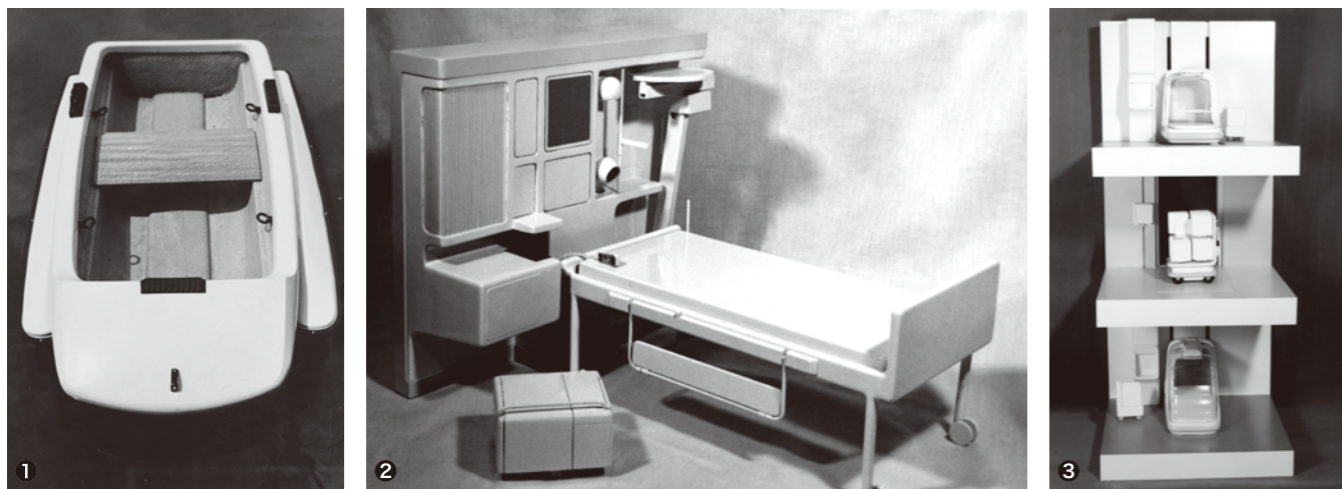
の実施に伴い学位授与機構の大学評価専門委員を委嘱され、長らく設置審議や大学評価に携わり、日本の大学の現状をつぶさに見てきました。この経験を生かし、これからの日本の大学水準の向上にも微力ながらお手伝いしたいと思つていきます。

2019年度より専門職大学が認可されます。デザイン分野はこの専門

職大学に大きく関わっており、デザインの専門学校からは専門職大学への認可申請が目白押しです。このことからデザインの高等教育のあり方が問われているといえます。ビジネスの業界ではMBAからMDA（デザイン修士：Master of Design Administration）への志向が始まっています。これからはデザインの価値がますます重要となつてきます。

人と地域の未来のために

私の地元でもマンション計画があり、近隣住民による建設反対運動が起こっています。人の暮らす環境をその地域に適したかたちで次の世代に引き継ぐことは大切です。長く環境デザインという仕事に携わってきた経験が地域の未来に役立てばと、微力ながら行動しています。



- ① パーソナル釣り用ボート(1974)
／団地のバルコニーに収納可能で小型車の屋根に乗せられるというコンセプト。
- ② ブラウン賞(1972)／Life on the Bed。
- ③ メディカル トランスポートーション システム(1974)／病院のインテリア。
- ④ ハッ場ダム計画のスケッチ(1989)／完成時のライフスタイル。
- ⑤ ハッ場ダム 長野原メガネ橋(2008)
- ⑥ ワイヤーグripper (1981)／絵画などを掛ける時に自由に位置を変えられる吊り具。
- ⑦ 江戸川区公共サイン(1985)／江戸川区役所。
- ⑧ 都バスデザイン(1983)